

## 主体的に社会に参加できる資質・能力の育成 エンパシーを働かせた社会の考察・構想

### 1 研究テーマについて

本校では、OECDのEducation2030プロジェクトが2019年に提示した『ラーニング・コンパス2030』の理念を基に、以下のような育てたい生徒像を段階的に掲げ、研究のテーマと結びつけた。

- A** 自らが“社会の一員”であることを自覚できる生徒
- B** 自ら、社会における課題について問い合わせをもち、社会的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に考察できる生徒
- C** 自ら進んで、持続可能な社会のあり方を、社会的な見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に構想できる生徒
- ▼  
**A'** 自らの“社会の一員”としての責任をもち、社会をよりよいものにしていくために、目標を立てたり、振り返りを行ったりしながら、実社会に参加していける生徒

生徒にとって、社会とは自分の外の世界のことである。時間的な距離や空間的な距離が、生徒自身から遠くなればなるほど、「自分とは関係のないこと」と認識する生徒もいることだろう。まずは、Aの「“社会の一員”であることを自覚できる生徒」として学習の舞台に立たせていくことが、私たちには求められる。そのためには、社会科における教材を、いかに生徒の生活に即した自分事として認識させられるかが鍵となる。この認識こそが、生徒の社会科を学ぶ意義につながり、原動力になる。この認識をもたせるために、どのような単元構想や問い合わせ、資料、生徒の活動がより効果をもつのか、本校ではもちろん、各市町の公立中学校でも長年研究が続けられてきた。また、この認識を土台としたBやCの生徒の姿についても、同様に、社会科教員にとって、日々の授業実践の目指すところであることは明白である。

本校では、社会科における考察や構想を通して、A'の「“社会の一員”としての責任をもち、…、実社会に参加していける生徒」の育成をテーマにしてきた。Society5.0やSDGs社会に順応できるだけでなく、VUCAの時代を生きていくうえで、能動的に「社会をよりよいものにしていくための変化」を起こそうとする姿勢の育成を目指してきた。しかし、生徒が協同的に構想した案が、机上の空論で終わってしまうことや、学校を越えることなく単元を終えてしまうことが多かった。そこで、ICTを活用した「本物の社会・他者」との関わりや、単元の終末に教室を越えた場面におけるアウトプット場面などを取り入れ、生徒の変容を見取ってきた。ここ数年は、学習活動のあり方の研究から、学習における見方・考え方についての研究にシフトしてきた。本校で行われてきた学習活動の研究成果を土台に、学習における生徒の視点や思考の流れに重点をおいた学習のあり方を研究し、地域の公立中学校の社会科教育に貢献していけたらと考えている。

本校では「社会参画」を政策や事業などの計画に加わること、「社会参加」を社会からの恩恵を受けたり、義務を負ったりしながら次世代の持続可能な社会を構想し、社会へアプローチしていくこと定義している。社会に関与する程度が高いという点においては、一般に「社会参加」よりも「社会参画」の方が高い。しかし、教室を越える授業を頻繁に行うことの難しさ、中学校社会科における限界があるため、「社会参加」を研究教科テーマに掲げている。社会科における認知的スキルや実用的スキルだけでなく、社会情動的スキルを発揮できる授業の実践を目指していきたい。

### 2 社会を考えていくうえでの視点や考え方について

主体的に社会に参加できる資質・能力の育成に向け、本校では、社会における課題の考察やよりよい社会のあり方の構想における「ウェルビーイング(Well-Being)」の考え方や、社会に対して安心・満足を感じている立場を示す「サティスファイド(Satisfied)」と、一方で社会に対して不安や不満を感じている立場を示す「ディサティス

ファイド (Dissatisfied)」の2つの立場からの視点についての研究を行ってきた。

### (1) ウエルビーイング (Well-Being) について

Education2030 では、「持続可能な開発と社会的連帯は、全ての人々のコンピテンシー (Competency) にかかっている」と認識されている。一方、様々な社会の変化によりコンピテンシーを身につける目標が変わっていくことから、コンピテンシーを身につけていく先にある目標として想定されたのが、「ウェルビーイング」という考え方である。

ウェルビーイングは、瞬間的に幸福な状態を示すハピネス (Happiness) と異なり、持続的に良好・幸福な状態を示している。そして、文化圏の違いを起因として、「良好・幸福な状態」は個人によって異なる性質をもつ。本校の社会科部では、この考え方方が中学校社会科の全分野を貫いて、「主体的に社会に参加できる資質・能力の共有すべき目標や指針の枠組み」になり得ると考え、教材開発や単元構想の基幹理念にしてきた。「変わりゆく社会にどう対応していくか」という受動的な姿勢ではなく、「どのような社会を作り上げていくか」という能動的な姿勢が、VUCA の時代においてより重要であり、「私たちが実現したい未来」を考える上で、ウェルビーイングの考え方は生徒と共有すべき概念であると考える。

また、ウェルビーイングのもつ持続的な循環性にも注目したい。例えば、労働と経済のウェルビーイングを考えた場合、一人の労働者がワーク・ライフ・バランスを保つことにより、良好・幸福感をもった状態で働くことができる。そのため、労働のパフォーマンスが向上し、共に働く職場の同僚も良好・幸福な状態になっていく。その先に、企業の成長が経済の好循環を生むことになる。その結果、再び一人の労働者の良好・幸福な状態を増進させ、良好・幸福な状態が持続的なものになっていく(図1)。こうしたウェルビーイングの循環性の考え方は、物質的な開発により享受される「良好・幸福」だけでなく、主觀を伴う精神的な「良好・幸福」という視点の広がりを与える、社会における課題の解決が、生徒にとってより「自分事」に感じられるようになると考えられる。3年間の学習を通して、よりよい社会を目指すことは、自分や他者のウェルビーイングを達成することであると実感させ、自分の状態と社会の状態を関連付ける生徒の姿を見取りたい。

図1



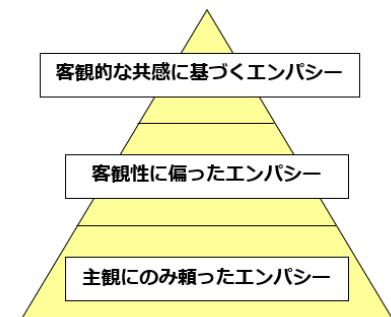
### (2) エンパシー (empathy) を働かせた考察について

ウェルビーイングを達成するための課題を考察し、解決に向けて構想していくためには、エンパシーを働かせていくことが求められると考える。エンパシーとは、他者の立場や境遇を理解し、思いを想像する力と定義づけられる。同じ社会で生活していても、各個人が見てきたものや感じてきたものは多種多様であり、全体の利益や平滑を考慮しただけでは割り切れない、それぞれの立場や経験に基づく主觀的な「良好・幸福」がある。まして、そこに時間や空間の隔たりが加われば、歴史的背景や地理的背景に基づいて、価値観の差異も生じる。歴史的分野においては、歴史学者 E.H.カーネの「歴史は、現在と過去との対話である」という言葉通り、なぜその事象を生徒に触れさせるか考えたときに、それを後世に残そうとした人々の思いにまで思考をめぐらせることで、生徒自身の感じる、学習することへの意義もさらに深まることが期待される。

エンパシーを働かせるといつても、「主觀的・客觀的」を中心として、その具体的な思考過程はいくつにも分類される。よって、本校ではエンパシーを3段階に分けて定義づけ、より高位な思考ができるような手立てを研究していきたい(図2)。

他者の思いを想像するにあたって、その人の置かれている社会的な背景への理解に欠けると、それは個人的な主觀に頼った思い込みになってしまう。中学生はもちろん、大人でも、表面だけを捉え、分かつたつもりで理解や反応をしてしまうことがある。特に、情報化社会でSNSなどを通じて気軽に全世界に自分の意志を発信できる現代において、この段階におけるエンパシ

図2



ーに判断を委ねることは非常に危険なことである。この段階から、客観性に基づいたエンパシーをもつようになるためには、「根拠」が必要になってくる。社会科においては、特に資料や既習事項との関連付けを通して、「なぜこの人たちが、このような行動に出たのか」という考察につながっていく。特に、時代背景やその地域の特色への理解を踏まえた考察は、生徒を主観的な思考から客観的な思考へと変換させていくことができる。

しかし、ウェルビーイングの達成に向けて求められるエンパシーは、その先の「客観的な共感に基づくもの」であるべきだと主張したい。社会的事象が数値化され客観的な事象として捉えられていくときに、「私はこう感じる」といった、個人の経験がもつ価値は切り離されてしまう。一人ひとりの数値にならない部分は消えてしまう。本校の生徒は学習意欲が高く、資料も率先して収集し、活用する傾向があるが、その考察がどうしても表面上の切り取りの理解に終わってしまっているように感じてならない。「当時の人はどんな思いで、その行動をとったのか」、「その地域の人は、なぜこの産業に頼らなければならないのか」など、一つひとつの問い合わせ合う中で、思い込みに陥らないようにあくまで第三者として、しかし客観的な情報による判断だけで終わらないように、その社会的な背景の下でその人たちがどんな思いで生きているか、共感する力が必要だと考えた。決して同情ではなく、共感しつつも、それを批判することがあってもいいだろう。この段階のエンパシーを働かせられることで、ウェルビーイングの達成に向け、研究テーマで目指す「“社会の一員”としての責任をもち、…、実社会に参加していく生徒」にも近づいていくことが期待される。

そのための手立てとして「情報」、「発問」、「単元構想」の3項目に重点を置き、にエンパシーを高める工夫を入れていきたい。「情報」については、資料や既習事項との関連付けにさらなる吟味が必要である。同じ資料を提示するにしても、提示や焦点化に差異をもたせることで、生徒の思考への刺激も変わってくるだろう。「発問」については、授業の軸となる発問に限らず、補助発問を工夫することで、生徒を共感に導くことが期待できる。「単元構想」については、単元の終末の生徒の姿を考えるときに、教師側が客観的な共感に基づいた生徒の姿をイメージし、そこに到達するまでの授業の流れを整理していく。毎時間、常に最高位のエンパシーを求めるのではなく、社会的な背景について正しく認知する場面、客観的な共感に基づくエンパシーを働かせた考察をする場面、外に向けて構想する場面と、メリハリをもたせて単元構想していくことが求められる。